杜甫傳

馮至著

B6版一八五頁　一九五二年十一月
北京・人民文學出版社發行

本書は、一九五一年一月から六月にかけ「新觀察」に發表されたものの單行出版であり、著者の馮至は、リルケの詩を中國に紹介した詩人としてきこえ、「十四行集」、「昨日之夜」、「北遊及其他」の作品がある。

この書物は、その名の示すごとく、杜甫の傳記であり、刊行の意圖はまえがきによつて明かである。すなわち、八世紀の偉大な詩人である杜甫を一般に紹介すべく、彼が當時どのように生活し、奮鬪したか、またいかに發展し、創作したかを知らしめるとともに、彼の作品にいかなることがらが反映されているかを、讀者に知らしめようとするところにある。かかる目的のもとに、全篇を

(1)家世與出身　(2)童年　(3)吳越與齊趙的漫遊　(4)與李白的會合　(5)長安十年　(6)流亡　(7)侍奉皇帝與走向人民　(8)隴右的邊警與艱險的山川　(9)成都草堂　(10)再度流亡　(11)幕府生活　(12)夔府孤城　(13)悲劇的結局

の十三章に分ち、詩人が歩んだ人生を詳細克明に追求している。しかもその記述が、「每句よりどころあり、史實にそむかぬよう努めた」と言つているごとく、一句々々史料にもとずいて、その正確を期しているてん、從來ともすれば興味本位になりがちな、この種の傳記ものとちがい、きわめて良心的であり、てがたい業績である。ただそれが、煩瑣な考證や論據によるわずらわしさを與えまいとして、問題解決の過程を一々しるすことなく書きおろされていることは、本書の性格上一應うなずけることではあるが、今少し親切に附註を施しておいてほしかつたと思われる點がないでもない。一例をあげれば、第二章「童年」の條で、杜甫の生地を河南の鞏縣とすることは、すでに吉川博士もその著「杜甫私記」に指摘されたところであるが、馮氏は更にその東二里なる「瑤灣」と論定したところには、我々の知りえない資料にもとずくてんがあることと考えられる。單にこれは一例にすぎぬが、かかる新資料を利用したと思われるところには、よし本書の性格がとうあろうとも、その疑問を釋明しておいてほしかつたと思う。それはともかくとして、千數百にのぼる杜甫の詩文の中から、詩人の歩みを物語る事實を、綿密かつ分明に調べあげ、これをその他の史實と巧みに結合排列して、詩人の生涯をみごとに描きなした努力と手ぎわのよさには、感服の外はない。本書はそのてんで、從來刊行された同類の著述からぬきんでた力作であると言つても、敢て過言ではあるまい。しかしそれだけでこの書が評價されるとすれば、それは著者の本意とするところでなかろう。著者がこの偉大な詩人の生涯を描くにあたつて、意圖したところの力點が那邊にあるかを、讀者はまずもつてくんでかからねばならぬ。つまり杜甫の生きかたをいかなる觀點から捉えようとしているかという問題になるが、それは、この書を一讀してすぐ氣づかれるごとく、封建治下に苦しむ人民を愛し、外族の侮りに祖國を思いつめる詩人杜甫を、民族のうんだ偉大な人間として傳えんとするところにあることは、あらためて言うまでもない。北京の人民政府のもとに、今や中國の民衆は、長年の資本主義や帝國主義の桎梏から解放され、新中國建設への輝かしい希望に燃えている。おりしも、國家社會の諸機構は大きく變革され、文學を觀る目も、舊來のそれ

とは自らにしてちがつて來たことはむしろ當然のことであり、人民または民族と遊離した文學が、よし技巧的にすぐれていようとも、それが單に貴族的、個人主義的な文學として、民族古典の系列からしめだされるようになることはやむをえない。清華大學中國語文系編著になる「祖國十二詩人」(一九五三年二月、開明書店)は、そうした傾向を示す著述として意味をもつように思われる。中國の學者たちは、かかる時にあたり、所謂新民主主義、現實主義的文學理論の上に立つて、新しい文學史を書きなおすべく、民族の古典への再評價を加えつつある。おのが生命を祖國に殉じた屈原、人民を熱愛した平俗の詩人、白居易などが、今また脚光をあびて論議の對象とされはじめた所以のものは、ここにある。著者が杜甫の生涯を描かんとした態度もまた、一にここにつながつていること、言うまでもあるまい。杜甫を中國最大の詩人とする評價は、すでに古くから定まり、民國の文學革命以後といえども、その評價に變化はない。ところでそうした評價のうらづけとなつていたものは、ともすれば、彼の詩の巧みさや、または彼のいだく忠誠心にあつたようであり、その詩を、所謂人民文學的な見地からあげつらつたものは、殆んどなかつたと言つてよい。それを敢て試みたのがこの書物であり、著者の良心と、熱情のこもつた筆とによつて、杜甫の人間像が、その角度からみごとにうきぼりにされている。失意や生活の窮乏から生れる杜甫の憂愁が、やがては人民への愛情に深まり、ひいては民族の憂愁へとおしひろめられていく過程を、讀者はこの書物をひもとくことによつて明かにするであろうし、また詩人杜甫の偉大な人間性に親しみをもつて接しうるであろう。かかる見地からなされる研究が、從來の缺點を補うとともに、それがまた正しい方法であることは否定するものでない。ところで、それにも自ら限界のあることはいなめない。杜甫の生きた時代は、今日と國家社會の機構を異にする。その時にあつて、たま〳〵人民へ深い愛情を示したからとて彼がただちに我々の所謂人民文學者であつたかのごとく、かつぎあげるのは、早計に失するきらいがある。人間として眞に偉大であるならば、當然そうした愛情をふりそそぐであろう。それをしも徒に人民文學者よばわりしようとすれば、却つて事實をまげるきらいが生ずる。杜甫がかつて河西の尉を授かつた時、それを拜辭したことがあり、その理由として、著者は、當時の縣尉が、良心ある詩人の到底受けるに忍びぬ職務であり、剝削に苦しむ人民に鞭うつことをさけんとして辭退したのであると、高適の詩を引いて辯しているが、はたして事實を傳える解釋と言えるであろうか。「あまりにも微官であり、今さら五斗米の爲に腰を折るのもと、考えたのであろう」と、吉川博士は、前記「杜甫私記」にのべておられるが、兩者の見解は根本的にことなり、私にはそのいずれが正しいとも分らぬし、またそれを解決する直接資料がないとすれば、著者が前がきにも特にことわつているごとく、かかるところこそ、個人的想像を加えることなく書いてほしかつたと思う。人民に同情をよせる杜甫の偉大さを强調せんとするあまり、ついすべる筆先に、こうした個人的な解釋がうまれる危險性を、大いに警戒してもらいたい。また杜甫の詩は、多くの人々が認めるごとく、言葉のもつ外面的な美しさばかり求めて、ややもすれば迫力にかけた六朝以後の詩に一大革新を加え、物自体の眞實にまで肉迫、これを寫實的にうたいあげ、やがてその晩年には、純粹な抒情詩にまで發展せしめた藝術的な高さのゆえにこそ、その偉大性がたたえられてきた。そうした創作面への鋭

い分析を、この書物はややおろそかにしているきらいはないか。初期の作品からみられる、對象へのあくなき熟視と、それによつてつかみえた物自体のもつ本質、それをきわめて適確な表現に定着さしていくすばらしき詩才、これがまた杜甫の獨壇場と言つてよい一面であり、それをよそにして詩人としての彼を語ることは、かたておちのそしりをまぬがれぬ。ここに鋭いメスを加えられたのは吉川博士の「杜甫私記」であり、馮氏のこの著は、少しく遜色がある。杜甫が宮仕えしていた時の作品を、庸俗の詩としてしりぞけるのは、まだしも理解されるとして、晩年の傑作であると言われている「秋興八首」「諸將五首」等、夔州にあつて作つた作品を、徒らに鏗鏘たる音節と華麗な詞藻にカバーされた詩としてのみ輕くあしらうのは如何なものであろうか。もちろん宋の朱熹にも

人多說杜子美夔州詩好、此不可曉、夔州詩却說得鄭重煩絮、不如他中前有一節詩好（朱子語類、一百四十卷、論文、下）

と言つた說もあることだし、かかるみかたが誤つていると言うのではないが、これらの詩をきめつけるに「裏邊到底說了些什麼？」なる言葉をもつてするに至つては、杜甫の偉大さの一面のみを強調して他をかえりみぬものと言わざるを得ない。もちろんそれらの詩には「朱門酒肉臭、路有凍死骨」と言つた、かつての尖鋭な感情や人民への愛情の言葉はみられない。しかし津々とわきでる憂愁をうたう心は、ひろく人間一般の憂愁にひろがるとともに、深く内にむかつて沈潛しており、ここに中國の詩は、純粹抒情詩としてのみごとな發展をとげているのである。從來のきれいごとの文學を、かかる地位にまで革新發展せしめた彼の功績に目を蔽うて、單に人民詩人としての彼をのみ強調することは、眞に杜甫の偉大性を傳える所以のものではない。

以上感じたままに書きなぐつてきたが、この書物について、今少しく氣づいたことがらをのべ、その道の專門家から教えを仰ぎたいと願うのは、杜甫が終始いだいている皇帝への思慕の念、それが母系にひく唐室との血族的なつながりによるのか、それともまた、そうした感情のもとずく思想史的な背景があつてのことか、著者は十分な解決を與えてくれていない。それからまた杜甫の詩には、吉川博士の示唆されるごとく、北方武人的なはげしさがある。それが單に彼の家系から出るものか、唐の文化の底に流れる北方的要素に起因するものか、もし後者もあずかつて力あるものとすれば、そうした文化の形態を、今少し明かにしてほしかつた。又七世紀後半に入つて文人の階層がいわゆる第二流の士人にうつりつつあるようであり、杜甫自身も、官僚家庭に生れながら、實はそれに近い二流の士人たることはいなめない。そうした階層から文壇の擔當者を出すようになつた社會機構の分析も、この書物では十分でない。更に杜甫がしば〳〵訴える貧富の懸隔、それは單に饑饉といつたものにだけ、その原因があるものとは思えない。もつと奥深い當時の經濟機構にその根をおろしているものと、私には考えられる。それがやがては杜甫のごとき沒落官僚出身者に救いがたいわざわいとなつてふりかかつているように思われてならぬ。以上の諸點が明かにされたとき著者の描こうとした杜甫の姿は、より一そう鮮明になつたことと思われるがゆえに、敢てぜいたくな注文を提出するとともに、諸賢の教示をもあわせ請う次第である。

（高木正一）